

一 次の①～⑤の□に当てはまる言葉を語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 夏も終わり、□ 暖の差の厳しい季節になった。
② 関東一□ に広く初雪が降るでしょう。
③ □ 度いいぐあいに、具もにえてきた。
④ □ 伝大会では、たすぎが次の走者へのバトンとなる。
⑤ とても□ 重な体験をした。

《語群》

エン チヨウ カン キ エキ

二 次の①～⑤の□に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① 夜空を見上げると、□ の川に多くの星がまたたいていた。
② 仕返しをして全てのうらみを□ らしても、本当の解決にはならない。
③ 気持ちを切りかえよう。くよくよしても後の□ りだ。
④ いやな事を言われても、あまり□ に持たず、忘れたほうがいい。
⑤ この小説の結末は「言わぬが□」だ。

三 次の文章は、国際連合ルワンダ支援団(UNAMIR)の総司令官だったカナダ陸軍の将軍が、活動後にまとめた手記の結論の一部である。

一九九四年、ルワンダでは激しい民族対立から、国連平和維持活動部隊が見ている目の前で八〇万もの人々が虐殺された。この手記で筆者は自身が関わったUNAMIRの活動を「このルワンダ人の物語は、危機にさらされた人々の助けを求める声に耳を傾けることができなかった、人類の失敗の物語である」と指摘している。その後にく以下部分を読んで後の問いに答えなさい。

カナダ軍平和支援訓練センターでは、教官がカナダ軍兵士に世界の状況^{じやうきやう}を説明するためにあるスライドを使う。地球全体の人口を一〇〇人とすると、五七人がアジアに、二一人がヨーロッパに、一四人が南北アメリカに、八人がアフリカに住んでいることになる。アジアとアフリカの人口は毎年増加しているが、ヨーロッパと北アメリカの人口は減少している。世界の富の五〇％は六人に握られ、その全員がアメリカ人である。七〇人は読み書きができない。五〇人は栄養不足のために栄養失調になっている。三五人は安全な飲み水を手に入れることができない。八〇人はきちんとした家に住んでいない。大学教育を受けるのはたった一人である。地球に住む人びとのほとんどは、第一世界に住む私たちが当然のことであると思っっているような環境とは大いに異なる環境で暮らしているのである。

しかし、第三世界の若者は未来への希望が見出せない環境で生きていくことにこれ以上我慢できないだろう、という事実を示す多くの兆候が見られる。私がシエラレオネの復興キャンプで出会った少年たちから、パレスチナやチェチェンの自爆テロリスト、そして世界貿易センタービルとペンタゴンに飛行機で突っ込んだ若きテロリストにいたるまで、これ以上彼らを見無視するわけにはいかないのだ。私たちは、彼らの怒りの原因となっているものを取り除くための具体的な方策をとらなければならない。もしないならば、重大な結果に見舞われることを覚悟しなければならない。

《注》 1 ルワンダ——アフリカ中部の国。ベルギーの旧植民地。 2 第一世界——民主的で高い技術水準を持ち、市民の生活水準が高い国々のこと。
3 第三世界——アジア・アフリカ・ラテンアメリカなどの開発途上国のこと。 4 シエラレオネ——アフリカ西部の国。イギリスの旧植民地。
5 パレスチナ——地中海東南部の地域名称。イギリスの旧植民地。 6 チェチェン——チェチェン共和国。ロシア連邦の一部。
7 ペンタゴン——本来は五角形を意味するが、アメリカ合衆国防総省の庁舎が五角形をしているためこのように呼ぶ。

地球村の状態は急速に悪化しており、その結果、世界中の子供たちが怒りを覚えている。その怒りは、私がルワンダのインテラハムウエの十代の少年兵の目の中に見たものであり、シエラレオネの子供たちの心中にあるのに気づいたものであり、ルワンダの普通の市民の群衆の中にあるのを感じたものである。そしてそれは、九・一一を引き起こした怒りである。権利も、安全も、未来も、希望も生き延びる術もない人間たちは自暴自棄な集団となって、自分たちが必要とし、自分たちはそれに値する^{あたう}と信じているものを手にするために、自暴自棄な事件を起こすだろう。

もし九・一一が私たちに「テロとの戦い」をおこない、それに勝利しなければならないということをお教えしたとしても、それはまた、若きテロリストたちの怒りの原因(たとえそれが見当違いのものであったとしても)をすぐにでも解決することに取り組まなければ、この戦いに勝つことはできないということも教えたはずである。私たちがいくらアルカイダの爆破犯を殺しても、世界中から彼の代わりをするたくさんの志願者が集まってくるだろう。次の一〇年間で、テロリストは大量破壊兵器を手に入れるだろう。才能のある若い化学者あるいは密輸業者が核兵器や生物あるいは化学兵器を手に入れ、私たちに對してそのきわめて個人的な怒りをぶつけるために、それらを使用することはやはり時間の問題である。

こうした怒りはどこから来るのだろうか？ 本書ではその原因のいくつかを説明してきた。強い部族意識、人権の欠如、経済の崩壊、粗暴で墮落した軍事独裁政権、エイズの蔓延、国家財政の赤字の結果、環境悪化、人口過剰、貧困、飢餓。このリストはまだまたつづく。これらの要因とさらに他の理由からただちに、人びとが未来への希望を失い、貧困と絶望の中で、生き延びるために暴力に訴えざるをえなくなってしまうという事態が起こりうるのである。この、未来への希望がないということ、それこそが怒りの原因なのだ。もし私たちが、こういった世界中の数え切れないぐらい多くの人びとに希望を与えることができないとすれば、未来はルワンダやシエラレオネやコンゴや九・一一の繰り返しでしかなくなるだろう。

〔注〕 8 インテラハムウエ——ルワンダにおける民族虐殺を行った中心的組織。 9 九・一一——二〇一一年九月二日に起こった同時多発テロのこと。

10 アルカイダ——アフガニスタンのテロリスト集団の呼称。九・一一の実行犯だとされる。

11 コンゴ——中央アフリカの地域。フランスの旧植民地で、現在は三つの国に分かれている。

本書で私は何度も問いかけてきた。「私たちは同じ人間なのだろうか？ あるいは人間としての価値には違いがあるのだろうか？」と。

間違いない、先進国で暮らす私たちは、自分たちの命の方が地球上の他の人びとの命よりも価値があると信じているかのような行動をとる。あるアメリカ人^{注12}士官は、八〇万人のルワンダ人の命はアメリカ人兵士一〇人の命を危険にさらすにしか値しない、そうやって恥じるところはなかった。またベルギー人は、兵士が一〇人戦死した後で、ルワンダ人の命のためにベルギー人兵士の命をこれ以上一人たりとも危険にさらすことなどできないと主張した。私がたどりつくことのできた唯一の結論は、私たちの中に人間性を注ぎ込むことが是非とも必要だということである。^③もし私たちがすべての人間が同じ人間であると信じているのであれば、私たちはどのようにしてそれを証明しようとするだろうか？ 私たちの行動によってしか証明しようがないのだ。第三世界の生活状況を改善するために使う資金を用意し、エイズのような恐ろしい問題を解決するために時間と労力を費やし、兵士の命を人間性のために犠牲にする覚悟をすることによってである。

軍人として、私たちは自国の主権を守るために山中を移動するのはいつものことであるし、生活をリスクにさらしている。将来私たちは、国益を越えて、人類のためにリソースを投入し、血を流す覚悟をしておかなければならない。私たちは啓蒙の、理性の、革命の、産業化の、グローバル化の世紀を生きてきた。どんなに理想主義的に聞こえようとも、この二二世紀は人間性の世紀にしなければならない。^④(中略)子供たちのために、私たちの未来のために。求めよ、さらば開かれん。

(ロメオ・ダレール著 金田耕一訳「なぜ、世界はルワンダを救えなかったのか」より。)

〔注〕 12 士官——軍隊において兵に命令を下す立場の軍人。将校。

13 リソース——資源や資産のこと。ここでは人材やお金を指す。

14 グローバル化——国家の境界を越え、地球単位で世界が一つだとする考え方。または、それを実現しようとする動き。

問一——部①〈第一世界に住む私たちが当然のことであると思つていような環境〉とありますが、私たち日本人も〈第一世界〉の住人です。私たちが〈当然〉と思つてゐる環境について本文の内容を、否定表現を使わずに整理し、30字以上40字以内で説明しなさい。

問二——部②〈彼らの怒りの原因〉とありますが、〈彼ら〉は自分たちが置かれたどのような状況に〈怒り〉を感じていますか。15字以25字以内で説明しなさい。ただし【人生】という言葉をもっと一度は使うこと。

問三——部③へもし私たちがすべての人間が同じ人間であると信じているのであれば」とありますが、筆者には〈私たち〉への疑いがあると考えられます。筆者にそう思わせる原因となった経験を、〈私たち〉が何かを明確にして40字以上50字以内で説明しなさい。

問四 ―部④〈この二二世紀は人間性の世紀にしなければならない〉とありますが、筆者のいう〈人間性の世紀〉とはどのような時代だと考えられますか。本文全体の内容を踏まえて90字以上100字以内で説明しなさい。

下書き用（使っても使わなくてもかまいません）

[illegible]

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

どうして素直に、頑張^{がんば}ってねって言えないんだろう。苛^{いらだ}立ちに任せるように言葉をぶつける間、あたしはどこか冷静な眼^めで自分の態度を分析^{ぶんせき}していた。だって、なんて言えはいいの。

あんたが、あたしを見捨てて、この場所から出て行こうとしているのに。

「わたしは、平気だから」サエは視線を落として、アルミホイルの上に載^のっている、つるりと光沢^{こうさく}を帯びたゆで卵^{なまご}を眺^{なが}めた。「ナツは、どうなの？」

あたし？

「ナツは、どうなの？ どうして、教室に行かなくなっちゃったの？」

勢^{いきお}い込んで言葉を投げつけた姿勢のまま、急に弾^{たま}切れを起こした銃^{じゅう}みたいになにも言えなくなった。

あたしたちはこれまで、ここに通うようになった理由^{りゆう}を互^{たが}いに話したことはなかった。理解してもらえないなんてかからも思っていないかったし、サエの事情^{じじょう}だって、きっと聞かれたくないことだろうから。六ヶ^{ろっか}月間。ずっとここで一^{いっしよ}緒に過^{すご}してきたけれど、あたしはサエのことをなにひとつ知らない。そしてまた、サエもあたしのことを、なにひとつわかってくれないのだと思った。

どうして？

そんなの、あたしが聞きたいよ。

「そんなの、サエには関係ないじゃん」

視界を意識すると、スチール机のねずみ色の表面が見えた。顔を上げられなかった。

「もういいよ。サエなんて、どっか行っちゃえばいい。あたしなんて放^{はな}つて、教室に行っちゃえばいいじゃん。絶対にうまくいきっこない

んだから」

だから、二度とここには来ないでよ。この裏切り者。

言いながらとてもみじめだと思った。堪^たえきれずに、そのまま席を立ててカーテンをかき分けた。嗚咽^{おえつ}を零^{こぼ}さないように息を殺して毛布^{はいこ}に入り込むと、雨音^{さわ}が騒^{さわ}がしいのにどうしてだろう、椅子^{いす}が鳴^{なり}って、部屋を去^さって行く上履^{うわば}きの音が聞こえた。

サエが保健室登校を卒業してから、三日が経^たつ。

あたしはここへ通い始めた頃^{ころ}の退屈^{たいくつ}さを噛^かみしめていた。出された課題に対して文句を言い合う相手も、わからない問題に対して知恵^{ちえ}を借りるべき相手もない。狭^{せま}く区切られたパーティションの中で、たった一人、そこに存在^{そんざい}していることをひた隠^{かく}しにするように、肩^{かた}を小さくして生きている。な^①じんだ景色ははずなのに、急に知らない場所に閉^とじ込^こめられてしまったみたいに。

ときどき知らない生徒が保健室にやって来て、長谷部先生と会話をしているとき、あたしはスチール机に突^つつ伏^ふして、ひたすらに瞼^{まぶた}を閉^しざす。ここには誰^{だれ}もいませんよ。誰もいないんです。だから、どうかこちらの方に誰も来ませんように。長谷部先生も、あたしなんかに手伝^{たの}いを頼^{たの}みませんように。クリーム色の仕切り壁^{かべ}の向こう。理由もなく教室に行けなくて、一年近くも保健室登校を続けている可哀^{かわい}想^{そう}な生徒がいるなんてこと、誰にも知られたくはなかった。だから長谷部先生が、なっちゃん、ノート取^けっておいてと呼びかけるたびに、屈辱^{くつじよく}に奥^{おく}歯^ばがきしんだ。パーティションから姿を現^{あらわ}して、訪問した生徒のクラスと出席番号、名前や怪我^{けが}の症状^{しやうじょう}などをノートに書^かき込む仕事^{しごと}だった。先生が生徒の面倒^{めんどう}を見ている間、彼^{かれ}、あるいは彼女は、奥^{おく}から突然現^{とつぜん}れたあたしを奇異^{きい}の目で観察し、ああ、保健室登校^{こう}なのか可哀想に、なんていうふうに納得^{なつとく}した表情^{へいしやう}を浮かべる。

どうしてこんなみじめな思いをしなきゃいけないの。見ないで。聞かないで。気付かないで。だって、あたし、べつに好きでここに閉^しじこもっているわけじゃない。違^{ちが}うの。ほんとうに、違^{ちが}うんだよ。でも、それならどうして、テレビや漫画^{まんが}があつて、好きなだけ遊んでいら

〈注〉1 嗚咽を零す——声をつまらせて泣くこと。また、その泣き声を出すこと。

れる自分の部屋から、学校の保健室までわざわざ通うんだろう。ずっと前に、長谷部先生にそう聞かれたことがある。そのときは、だって、サエと遊べるんだもんって答えて、二人してトランプのスピードで勝負をしていた。その答えに嘘はないんだ。でも、その前はどうか。サエが保健室に通うようになるまでの、ここで一人きりで過ごしていたときは？ 先生を交えて、お昼休みにUNOで遊んだと、きのことを思い出した。ここでやる遊びって、部屋にあるパソコンやWiiと比べると、すつごくローテク。ださくて、くだらなくて、小生みみたいで、それなのに――。

気がついたら、ゆで卵の殻を剥いていた。いつの間にかお昼で、そして、いつの間にか一人だった。長谷部先生の気配がない。今日も、職員室まで給食を取りに行く気になれなくて、あたしは脆くひび割れた卵の殻に指を食い込ませていた。今朝はパン一枚だったから、すつごくお腹がすいたけれど、でも、いいんだ。時計を見ると、お昼休みの真っ最中。こんな時間に、廊下は歩けない。眩しい陽射しに怯える吸血鬼みたいに、あたしにはお昼休みの喧噪が合わないんだ。無邪気にあがる楽しそうな声や、廊下を駆け抜ける上履きの音は、あたしの身体を容赦なく焼いてしまうから。

サエは、どうなんだろう。もう、教室に戻って、なじめちゃったわけ？ 泣き言を言いに、保健室に来たりしないの？ 今日はどうしてるとか、メールくれないわけ？

「昨日の課題、ちゃんと終わらせた？」

長谷部先生が戻ってきて、パーティションの中に入ってきた。

閉じたノートに視線を移す。昨日の課題だから、本当は昨日までに終わらせないといけないものだった。けれど、一人でする勉強はひどくみじめで。卵の殻は、今日もうまく剥けなくて、表面に爪痕が残ってしまう。

長谷部先生は向かいの椅子を引いて、そこに腰掛けた。それから、「サエちゃんがいないと、寂しいねえ」と言う。空腹に、お腹が鳴った。

〈注 2 喧噪——物音や人の声などが、やかましいこと。〉

あたしは卵に張り付く殻を取り除きながら、かぶりを振る。寂しいねえ。長谷部先生の声は、耳に入り込んで、あたしを身体の中から揺さぶった。寂しいねえ。サエちゃんがいないと。いつの間にか指に力がこもって、柔らかな卵殻を強く叩き潰していた。罅が入り、その全身に波紋のような痕を残していく。寂しくない。あたしは誰にも聞こえないようにつぶやく。寂しくない。寂しくなんかない。

先生は聞く。

「サエちゃんが教室に戻れるようになって、嬉しくないの？」

手元で半ばひしゃげてしまった不細工な卵を見下ろす。は？ っと思った。意味、わかんない。教室に戻るって、嬉しいことなの？ だって、あそこ、あたしを笑う人たちがいない。あたしのことはかにして、掃除を押しつけて、陰口を叩いて、くすくす笑って。

わかってるよ。あれって、べつに、いじめっていうほどひどい仕打ちじゃないし、みんなだって意識してやってることじゃない。ただ、教室の隅隅にいる大人しいあたしのことなんて、なんとも思っていないだけで。

なにかひどいことをされたわけじゃない。明確な理由があって傷ついたわけじゃない。ただ、ばかにされてるような気がするだけ。だから、どうして教室に行かないのって聞かれると、答えられなくなる。教えて欲しくなる。わからない。わからないんだ。自分にもどうしてなのか。どうして、脚が震えるのか、身体がすぐんでしまうのか、ほんとうに、わからない。サエはどうだったんだろう。サエにとって、教室ってどんな場所だったんだろう。

「サエは……」これはあたしの姿みたい。みすばらしく、ぐちゃぐちゃになった卵を見下ろしながら、あたしは聞いた。「教室に、戻りたかったの？」

「そうね」先生は答えた。難しい問題に考え込むように時間を掛けて。「戻りたかったから、ここを出て行っただんじやないのかな」教室に戻ることができて、サエは嬉しい？

「もし、そうだったら」

〈注 3 かぶりを振る——頭を左右に振って、否定の意をあらわすこと。〉

4 ひしゃげる——押されてつぶれる。

言葉が震えた。先生は聞いた。嬉しくないのって。そんなの決まってる。だって、サエが望んだことなんですよ。先生、あたしね、サエに訪^{おとず}れるラッキーは、全部、自分のことみたいに嬉しい。嬉しいんだよ。あの子が幸せそうに鼻歌を歌っていると、あたしまで、今日はいいことあるんじゃないかって、そう思えるんだ。それなのに。

それなのに、どうしてあんなふうに言ってしまったんだろう。頑張つてねって。負けないでねって。たまには、ここに顔を出してねって。どうして言えなかったんだろう。なんて、なんて、自分勝手なんだろう。「嬉しい、よ。それなのに、ぜんぜん嬉しくない。嬉しくないんだ」あたしの喉^{のど}は、風邪^{かぜ}のときみたいに熱く震えて、だから、言葉がうまく出てこなかった。頬^ほを手の甲^{こう}の感^{かん}触^{しよく}が通り過ぎていく。ニットベストの肩で、溢^{あふ}れるそれを拭^{ぬぐ}った。

「なっちゃんは、教室には戻りたくない？」

「戻りたくない。あんなとこ、戻りたくない」繰り返^く返し、かぶりを振った。「どうして、サエは平気なの。どうして、今になって教室に戻^{かえ}っちゃったの」

そうね、と長谷部先生は頷^{うなず}いた。

「きっと、あなたが過^{あや}ぎすには、ここはもう狭^{せま}すぎるんだ」

先生の手が伸^のびる。スチール机に置いたままの、もう一つの卵を取り上げた。

「どんな生き物だって、生きていれば大きくなるんだよ。どんどん大きくなって、部屋にも、家にも、学校にも閉じこもっていらなくなるんだ」

なにそれ、と思った。家や学校より大きくなるなんて、ゴジラじゃん。あたしは、半分だけ。そう、半分だけ笑う。

「あたしは、教室なんて戻らないよ。高校にだって行かない。就職だってしないもん。ずっと部屋に閉じこもってる。それでいいんだ。それでいいんだもん」

そう、だから進路希望なんて考えない。このまま保健室にこもって、家に閉じこもって、肩を小さくして、息をひそめながら生きていく。死んじやったってかまわない。かまわないから。だから、学校にだって、教室にだって、行きたくない。それでいいんだ。

だだをこねるような言葉を、先生は最後まで黙^{だま}って聞いていてくれた。

「でもね」と、先生は言う。「やっぱり、なっちゃんは大きくなっちゃうんだよ。部屋に閉じこもっているつもりでも、身体がどんどん大きくなって、そこに収まらなくなっちゃうんだよ」

意味わかんない。意味わかんないよ。

「あたし、怪^{かいじゆ}獣^{じゆ}じゃない」

先生の言葉、すべて否定したくて、かぶりを振った。

「うん。でもね、人間って、大きくなるの。身体じゃなくて、生きていく場所とか、人との関^{かん}わりだとか、そういうのがすごく大きくなって、収まらなくなっちゃうんだ。身体は勝手に大きくなるの。ぐーんと大きくなったら、なっちゃんは大きくなったぶん、外で生きていかないといけないんだよ」

先生の言葉を聞きながら、あたしは想像していた。小さな居^い心^{しん}地の良い空間を、自然と突^つき破^{やぶ}ってしまうほどに、でかくなっていく自分の身体を。部屋を突き破^{やぶ}って、家を破壊^{はかい}して、街よりも大きくなっていく、怪獣みたいな自分の姿を。

「あたし、大きくなんないよ。絶対、途^と中^{ちゆう}で死^しんじやうよ」

「それでも、今は生きているじゃないの。③ なっちゃんは気付いていないかもしれないけれど、今もじゅうぶん、大きくなっているんだよ」視界に、先生の手が入り込む。アルミに包まれた銀色の卵が差し出されていた。ぐちゃぐちゃになってしまった卵を置いて、代わりにそれを受け取る。顔を上げると、先生はもう立ち上がっていた。

「なっちゃんにとって、教室がまだ怖^{こわ}いところなら、無理をして戻らなくてもいいんだ。でも、サエちゃんにはきちんと謝^{あやま}りにいかな

きや。なっちゃんは、だから泣いているんでしょう？」

泣いてる？ あたし、泣いてる。

銀の卵を両手で包んで、唇を噛みしめる。どうだろう。謝りたいから、泣いているのだろうか。わからない。もしかしたら、一人になりたくなくて、だから泣いているのかもしれない。そんな自分勝手な理由で涙を零しているだけなのかもしれない。自分のことなのに、わからないことがたくさんある。ほんとうに、わからない。わからないよ。けれど、自分のことを教えてくれる人は、きっとどこにもいないんだ。

しばらく先生を見上げて、胸の中を漂う、一つだけ確かな気持ちを見つけた。

サエに会いたい。

ごめんねって、言いたいよ。

頷くと、先生は微笑んで、背中を見せた。

それから、クリーム色の仕切り壁を動かして、あたしが進むべき場所を教えてくれる。

急に、狭かった世界が開けた気がした。

（相沢沙呼『雨の降る日は学校に行かない』「ねえ、卵の殻が付いている」より。作問の都合上、表現を改めた部分があります。）

問一

——線部①「なじんだ景色のはずなのに、急に知らない場所に閉じ込められてしまったみたい」とありますが、「ナツ」がこのような感じるのは、二つの出来事があったからです。その一つは、「サエ」とケンカをしたことですが、もう一つの出来事は、どのようなことですか。20字以上25字以内で答えなさい。

問二

——線部②「ぐちゃぐちゃになった卵」は、「ナツ」の、どうしてよいかわからない状態の比喻です。「ナツ」が、そのような状態になったのは、なぜですか。20字以上30字以内で答えなさい。

問三

——線部③「なっちゃんは気付いていないかもしれないけれど、今もじゅうぶん、大きくなっているんだよ」とありますが、この「長谷部先生」の言葉通り、この後、「ナツ」は、「生きていく場所」や「人との関わり」を広げる可能性を持つ気持ちを、自分の中に見つけることになります。その気持ちを15字以上20字以内で答えなさい。

問四

——線部④「狭かった世界が開けた気がした」とありますが、ここから「ナツ」の気持ちの変化が読み取れます。当初の「ナツ」はどのような気持ちで、そこからどのように変化しましたか。90字以上100字以内で説明しなさい。

[illegible]

20

国語試問解答用紙

平成三十一年度
中学入試
1 回

2

受験番号

一

二

三

問一

①
②
③
④
⑤

問二

①
②
③
④
⑤

問三

①
②
③
④
⑤

問四

①
②
③
④
⑤

問一

①
②
③
④
⑤

問二

①
②
③
④
⑤

問三

①
②
③
④
⑤

問四

①
②
③
④
⑤

室 号

受験番号

氏 名

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。